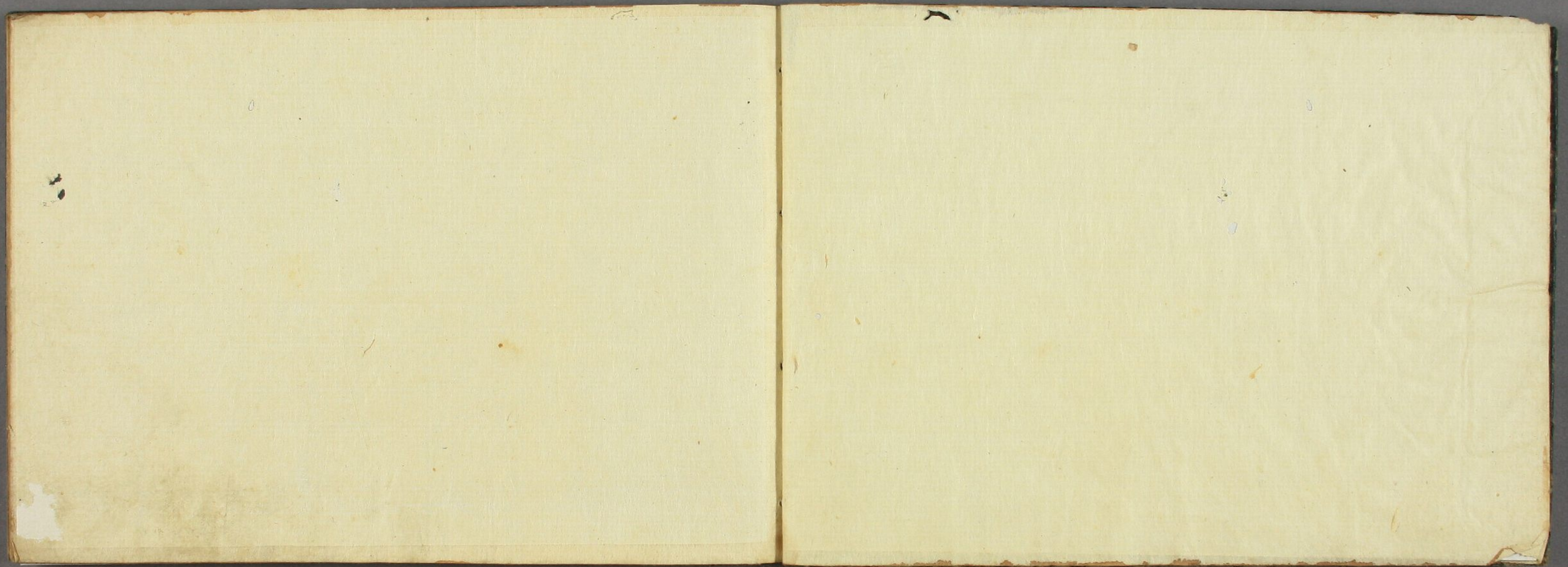




撰立十番哥合註





撰五十番哥合

一番



左 中納言定家

里の海士の階やき衣立別世
別——と云うぬ表乃乃令
是席奇し里の海士に國乃名
不也かゝる不と可なりと云
立りくまことと云やき衣立別
海と心可なりと云

右 従二位家隆

表といふも不不出す武彦也乃
若しつて此のゆきの下草
表といふなりく深雪れ仲るれ
は云の氣色ももけとく草
葉りしやうぬ也葉りあ色不
出すといふ草は武彦也不
けらる草なり

左

さくら柳り新乃下にもふ言ぬ
一夜宿りせまふ乃山守
ふまひいもいそがしきつゆの尾よの
さくら柳りあてかさじ橋ありあ
舟とこしゆるんりあかすもも
り此ちあ目のくもとこし
ふ柳とらゆしひ花のりよに
さあさるんかあり

右

氷ふとわろしめぬ雲そあわれん
つゆとゆり山の橋本
六のりしは世は因かしたくも
かまひん記りあ海こくし志かれ
はあらしめぬやま打るぬし也
えん記書と依定記とんそい
そらりあり

左

屯のちふ一巻すけと帰馬

六より一越路のえだのりして
面白記おもしくか(色)一巻
すけいとし物とそら(す)年し
く魚記に巻えそよのめせよとし
世俗面すけりといふなり

右

橋記咲ぬら時にかほしくなり乃
山のすくさりそら
おがこの雲は谷家とたかか
しあり山のまこふそら橋こ
丸

名と志新一巻の冠も雲とや
ふさくら産乃あなを乃
是引の山橋戸と時空てけり
とされりそら山橋戸記
恒りしそら下し橋戸の名と
あらし咲ら家の冠も屯の
君と吹らしは時がの云渡り

不眠つを憂家の胡弓を括め凡のりまき思ふ

右

今朝足色ハ夜の曇ハ霞ホリハ
凡の下リも雨の

一夜落葉記し木す枯おもふ
凡の上ハ地色ハ凡の下ハと然ハ
只庭乃常ホ凡の吹也

丸

名取川表の月夜にけりて

花あそぶのむせし乃榎木

冬丸川世の榎木折るはせはふ
せんとうあひんそあらん

目うすのあつそとこといふ

花の咲つはけいそととん

ねはまのむせがら

右

高砂のふゆは花やみ川表の

あつそふみゆる松のそと

けり梅のさつ也浦ホ極み

ちてけとらうふふ花の多
うと松とくそとけりてふ

再入知るわ

丸

河鴨の泣とけとぬみつのほ

れまふかそまやけりらん

菖蒲のさそく入の白浪のせ

はさき我おもふみつ乃

はな名おこまのうけりて

さそく入のそとそあて鴨の

あとのけは波とけりて

とそおもふまふそとゆら

なり我はさそくそ世おも

てむおととあ下のまら

右

ゆみそそ後者の浪乃夏家

うけみそれけりそり地ま

奥列おまそとけりて

悴勢ふは菫と濱萩といふや
あさう忠と對し花うらみ忠
原と對志てふありあそ夏草
の深きうんたるしーやみーと
こいしれこちる鳥のまゝやが
せとらふさうあり

た

がねぬきりゆふ竹鳥のまゝあおの
とのせおもにぬよい乃みーりさ
尾おもにすすもや唱てむとみ
しーくがととがしあり

右

秋は海と遠くふ鳥乃まゝありあお
あすありてあしき有明の月
ふ鳥のちりりうくしーむとと
ふしありまゝありおといひてむの
ふしとまゝありあのがりき秋の夜
はまゝおとまゝとてみしーむ

小月はあすありてあしきとあり
上下の匂のるふおあやくこと
まゝありあひありいじくとのま
くひりあり

た

菫のやうにわれの麻のしーらまふ
しーしーくゆれ鳥のしーかく
がふらうさみしーき菫のしーの
ましりくそまのまゝとるしーては
まゝしーしーむのまゝあり

右

三寄にのふか乃らまゝと乱草の
丁情葉りりうはさ月留のは
ふかのをさ菫とけつぬきてみ
うさおまゝしーふおとまゝあお
ありあなるあふふかのりきまゝ
みそれぬしーしー

た

おひひく霞みつ下のさゆあえれ
ま〜しぬねおしふかまおれを
さゆり葉の〜しぬねと百葉お
くちり 秋はるか〜山陰お母ひ
きて吹きさおと秋の〜凡
夏乃哥なり

右

じと玉のやみのうは乃物鉦舟
な乃さ〜りやや暮も〜ん
物うひおのやみのうつそらお
とつらうり 月ぶが〜そら暮も
じと〜とあり

左

秋と〜吹あぬ凡おち〜ら
し田の〜乃乃露の下草
ま〜と〜と〜と〜と〜と〜と
し田の杜乃秋の〜を
し田乃ゆり〜秋の〜を〜

やふぶ〜とあり〜和なり色
うらと〜と〜と〜と〜と〜と
ほ〜とあり

右

水ら〜と山の下萩〜と
夕日〜とれおあ〜とせを〜と
心家の秋し夕日〜とれ秋凡
ら〜と〜と〜と〜と〜と

左

丁梅のお〜とれか〜と
園吹こ〜とゆら〜と
丁梅の〜とゆら〜と
凡の〜とゆら〜と
社〜とゆら〜と

右

秋凡お山の〜とゆら〜と
〜とゆら〜と
〜とゆら〜と
〜とゆら〜と

凡にりえかけりけなく母し
出るとりりてしそそしりてと
あしとせぬなり

た

か紙さりのとの儀身ふるを病も
あつらふあつらふ杖の夕ぐれ
かことさちいそとそちせそとの
とのあさ地ふさ杖の夕の翁
いあしりてとととりり

右

花と葉とりりくぬけ萩り枝お
むらむらけあさ乃夕夕暮
い川りふしんいおりししりら
くちるふあさかけいこ杖の
夕萩の面白新といんま

た

わさ地あとのい藤原いちりひま
とらさ人お杖凡そ吹

名あふりす儀身のをそけ
か地ことのとの原とら竹藤人
えりひしき極く儀身の不うお
遠さ人お吹とかり燕のそら
さ人いそとさうとあかり

右

萩とらふ神吹くを杖凡お
うささ萩乃らそらうらふ
萩のあさとらむけ杖の色そ
それと吹くせと神のうらそ
うけらふとし

た

うけらわぬ萩乃子茶おれり
凡の上りかき萩杖乃萩
え萩杖い萩さうさ地とそれ
は凡のやき拂さあし地おあ
う萩とらふうらむけとそ
凡のうけらふとあ

右

又やうじ又やんさうじましく病の
玉と新しき家あさ萩乃花
も乃雷ちる春の始かのきく
ひびくもあけおもちあさい又や
んじみすすいのちあけあさきこ

丸

かゝるは長しこのくをくふ
じがしきこさ乃杖の夜乃月
月よあそおおそし新しけれ
かきすんく月おおもいすこ
られと月いそく空とすみき
あがしり

右

若ぬよふ山のしをく成おさあ
く家より物る杖の夜乃月
えより物ると七日八日の月いほ
天ふて足行るといふがかり

丸

昔きふれあ郷乃あさこの月
あしうす光のいくちああさ
あれきふかきととむりといふ
里むるにいふかきとせかり

右

有明の月乃杖の紅葉とと
峯ふのましととしり鳴也
久堅の月の極と杖いりと紅葉
すしととやてあはさうん
杖深かりけ果ては言の紅葉
あそとと有明の影とゆり
峯ふのましととと麻ハ紅葉
り鳴也杖のりらととと
をる月のてるといふり

丸

何凡ふ巻けりる月のまきれは
八十字ち人も衣うつ也

宇佐乃川急の掛衣思ふ
川より垂けつるとなり

右

やけ荒雲の衣乃きぬく
月ふかき
舟と雲とのまぬく交ふ
しらすや

右

伴助の荒と秋の色ふ吹
よその糸乃もる新き
いふゆい内にかうらぬ乃よそめ
の糸とけりわ杖深きまわい
まの荒ふめしわぬむ乃解
ありよそめ糸といふもとい
しらすや

右

朝日さそく根のみ雷定解て
立とよよぬ留士の川音

面士川の音はきそとも
とよよく雷のひしりふ朝日
やきそとも飛をなり

右

高所のおおと杖はわぬわぬ
けり夕暮や麻は鳴なり
高所麻の位なり杖は
かへての杖なりと高所の杖の
夕ふりさりそるるふ麻は
かくとなり

右

銀河杖の一夜乃ちきりそふ
交地乃麻の音とわか
かた地は河はなり天は
ふあかり然はきとこの
にして七夕の契も麻は
てきや鳴しんとなり

右

夕月日じひの星乃舊紅葉
海さきさきけしき秋のちか
月と目とけしきふとけしき
くみといもんきあけけしき
のうららひききる紅葉さ
きとけしきうす紅葉りれと
秋乃かけきるさけしき

右

ささけの秋の星乃明ぬれ
海さきさきけしき秋のちか
月と目とけしきふとけしき
くみといもんきあけけしき
のうららひききる紅葉さ
きとけしきうす紅葉りれと
秋乃かけきるさけしき

右

小倉山阿多るは乃わさかく
ささのふけしきうす紅葉りれと

定家いささく小倉山とささけ
ささけいささく小倉山とささけ
とみささけいささく小倉山と

右

秋凡いささくおのちかきと
萩の葉ささけいささく小倉山と
ささけいささく小倉山とささけ
葉乃外ふ吹てささけいささく
乃ささけいささく小倉山と

右

秋いささく小倉山の星乃
にさ乃木の葉乃ちかきと
冬嶺孤松秀のふし秋は
ささけいささく小倉山の星乃
秋乃ちかきとささけいささく
にさ乃木の葉乃ちかきと
くささけいささく小倉山の星乃

右

神代あり小倉の空乃紅葉よ
下照非やそれりしめらん
とくくといふる名は神代あり
かあり松ふく照きく紅葉
のあり下照非それりしめ
るらんといひり下こふおよと
竹魚くくは

丸

花鶴葉乃枝と移もとくぬ
りれくあゆ 秋と志とて
杖乃野の葉れ枝う花鶴ふお
出てまねく神とみゆらん
鶴の枝移してきりかあり
杖ふおせしゆとせ

右

葉の葉にくく草すひのきりく
杖凡あきぬ移ん言やせき
音く小松ささらん音をらん
はかりあり

いふねー杖う草おんをすじ
葉葉とやうりとあうさあを
杖凡あきみさめくといふおん
はかりあり

丸

浦凡やうふ波ふす浪葉の
移ふあうくくねく鳴ふ鳥や
くを吹に浪うつ岸乃雲がれや
移ふあうくくねく鳴ふ鳥や
ねおあうはせとといはせくかく
かあり岸葉のやにく又浦凡
おはせく鳴ふるかり

右

表や寒きさ里い雲井の木柳ふ
し名さく花家りはあり
里い雲辰といふらんかりん
かり又ふらんしにわ乃
とときよあぬかりさそん

さくらさくらさくら

丸

志賀は浦や氷もしくは辰田船の
おれ乃上乞お雷はやりは
おれを室折の方也氷折
志賀のりくさきさきりあり
こい字あ板あり

右

菖蒲刈鴨のくさひ乃夕おれど
おれ乃上乞お雷はやりは
おれを室折の方也氷折
志賀のりくさきさきりあり
こい字あ板あり

丸

雪とれの竹乃下道跡は
おれ乃上乞お雷はやりは
おれを室折の方也氷折
志賀のりくさきさきりあり
こい字あ板あり

蕙あーほとよありおおよく
おれ乃上乞お雷はやりは
おれを室折の方也氷折
志賀のりくさきさきりあり
こい字あ板あり

右

くもとよと雲の夜はうとわじ
おれ乃上乞お雷はやりは
おれを室折の方也氷折
志賀のりくさきさきりあり
こい字あ板あり

丸

小初階や春の常盤木吹きあり
おれ乃上乞お雷はやりは
おれを室折の方也氷折
志賀のりくさきさきりあり
こい字あ板あり

右

何のちるまのまらぬの冬は
高ハ氷の氷の氷の氷の氷の氷
を氷の氷の氷の氷の氷の氷
の氷の氷の氷の氷の氷の氷

右

白妙の氷の氷の氷の氷の氷の氷
を氷の氷の氷の氷の氷の氷
吹かす氷の氷の氷の氷の氷の氷
高ハ氷の氷の氷の氷の氷の氷
の氷の氷の氷の氷の氷の氷

右

高ハ氷の氷の氷の氷の氷の氷
を氷の氷の氷の氷の氷の氷
吹かす氷の氷の氷の氷の氷の氷
高ハ氷の氷の氷の氷の氷の氷
の氷の氷の氷の氷の氷の氷

右

高ハ氷の氷の氷の氷の氷の氷
を氷の氷の氷の氷の氷の氷
吹かす氷の氷の氷の氷の氷の氷
高ハ氷の氷の氷の氷の氷の氷
の氷の氷の氷の氷の氷の氷

右

高ハ氷の氷の氷の氷の氷の氷
を氷の氷の氷の氷の氷の氷
吹かす氷の氷の氷の氷の氷の氷
高ハ氷の氷の氷の氷の氷の氷
の氷の氷の氷の氷の氷の氷

右

高ハ氷の氷の氷の氷の氷の氷
を氷の氷の氷の氷の氷の氷
吹かす氷の氷の氷の氷の氷の氷
高ハ氷の氷の氷の氷の氷の氷
の氷の氷の氷の氷の氷の氷

つとむがしやふえを恨みね
逢刃三の指のらふくくやれを
乃んし香をその指乃はくく
御つき事と知りいふくい油の
つとむがしよも去おていえくく
ぬとかりあり

右

が記名のこくつ有る乃を板お
すくくしをくくを糸とすくく
不逢恋乃ん也がすくく名の
夕夕とくけすありは境の糸
やとく鶏お本御と有てそつる
おとありすくく御いきん
逢ての乃も也が記名すれ
すくくせそそきふとかりあり

右

高野下なるけつりるふ乃
色うすかりぬ社とんそくや

古今をりせえ
しきふ

いそりるふ

下葉のすくくをふりあり
つとむおくくぬは下葉のを
はおおてもり記とふん也

右

が記名ある神おいふやそそき
早雲打くくぬ杖の重乃月
つとむ神やとさく月もすくく
とかりあり

右

白歌いすくく宿おえ立て
あそくぬくせ乃をふ吹く
あそくぬけつあややくそく
あひりくそくそくありぬ
くしり人のりはく御系
かそそくそくそくすく
いと知りあやめて面鏡
あそくすくそくそく

つとむがしやふえを恨みね
逢見このほのらふくくやれを
乃んしき事と知りいふくい海の
つとむがしきも去おていえうらみ
ぬとかりあり

右

が記名のこくつ有る乃を返お
すししき事と知りいふくい海の
不逢意乃ん也がしき事と知りい
夕とよりけりけりけりけりけり
やとく鶏お本綿と有てそつる
おとありすししき事と知りい
逢ての乃ん也が記名すれ
すししき事と知りい

丸

高野下葉りけてのらふくく
きりすかりぬ社とんこや

白鳥

白鳥はけりぬもいしきり
下葉のきりすかりぬ社とんこや
けりぬもいしきりぬ社とんこや
はおおてもりぬとんこや

右

が記名のこくつ有る乃を返お
すししき事と知りいふくい海の
つとむがしきも去おていえうらみ
ぬとかりあり

丸

白鳥はけりぬもいしきり
下葉のきりすかりぬ社とんこや
けりぬもいしきりぬ社とんこや
はおおてもりぬとんこや
かとしき事と知りいふくい海の
つとむがしきも去おていえうらみ
ぬとかりあり

人とりてそを松凡の吹ちと

右

今れはふ今逢乃後も程を
さこのめくりつるまの吹か乃
永日くふふりららうきんと
りけきて今りりて夕ふま
かせやりり

左

すしそ吹との備乃極うせお
がくくさつゆのそけくそ思ふ
いしそとふ一せほの事吹上
乃備紀國に真砂と凡の吹
あつるふりり我思ひ吹の
酒さよのそくさつとがわ
あきの初るるかの備とがのそを
時とそとの後野おきん煙
急めや今と思ひあわや
小井後野おきんあり電か

まの種りし焼車りりまを
てととの煙もやふり思ふ
人おすさつりてそをぬと也

右

位のは乃まの種さやぶる彼の
いふといかりけきまとそお見て
位のは乃思ふる彼の思ふ人
まのゆすひらん人あまらん
まの根とほけきあり種さか
けふふしとがわらやしきん
ふりはんとせきるく女あ
まるとそとくこれんぬと

左

蕙乃思ふ堂や海まや焼
思ひと恋とすうかりけ
そそまの早うの色のそくし
りりし言乃あまのそく出ら
思ひ恋はをそと出ふそとて

いふなりしにきり我胸のよろく
りゆるい若胸の若乃金の御
小なりて海士と焼炭も海も
こがれり若乃のやふの小文字不鬼
後なりりのとての堂火もくわ
がわ小文字おてりつひひされ
くく若乃屋のやにたりきる
うとふふなりりよくくをとて
ユマすしきりり

右

床の海花いふとがわぬ
がしきもぢりもはりの思ひお
胸の富士神はは見えんかたや
そふちも段もまぬ日とけ
くすの二方乃きくひぬ

右

我意の向はまどぬく一鷹の
「海さくやきくやの神く

鷹とあるよふより車不飛と云
きしりりきるといねまんとて
あかくもゆかり

右

自玉の統絶乃橋の名とほり
くけくおつる社乃がきふ
緒絶橋奥別也我儀は玉と
ほりぬききるとのやきてみ
あうぬかりわらとこの橋
の名もさつりしとがり

右

永日のまらわつゆふう海茶の
ゆきてとそまゆくとけぬ君か
すらのひにがらきおこして永
目乃すりとほりきり又ゆきて
そりけくしつあふや下わりわ永
甲ふりわていせんくもろも
くひかりるるしそのとく

くらもそらもさかたしこしとまじぶ
むぬかりり

左

まねすにたれし神や水あらしん
ねぬ水乃床のたね乃さじり
あひらひし人なりしにをりり
てあひのめをさの神は氷し
あまをたれすにその人の神や
あらしんとかりり

右

思ひ川けり水のりす氷
かさねる水は乃存さうめ
大元乃母のきりしはくれは
彩りり水そと氷りきり
氷りすに氷かたをけり乃
うさする水はふるぬさく
人となのうにみてほふぬぬ
ゆふそ乃さくひの存とらう

わーとかりり

左

おぬ人と後がの浦乃夕がねふ
ちくちとーは乃男とこねつ
後ほの浦おぼろく事万葉
りみゆ夕がねとハ物言
にまのありりてつとらう
するやうに我物の中あう
とかりりおぬ人というらう
そこのめてこぬ人というかりり

右

ふ川の紅葉おぼろ水乃泡の
ふふ出てしめろく神ふ
紅葉にまじる泡お我紅床と
きとくをかり

左

誰と氷毎千り氷玉の結乃
かりくおとあまをすまうか

花の...
...
...

いづれと行りし我身とすれども
あくつりまのかるもおほし形も
乃きくむなりといふれとが記せ
おととおととしてとらるまきとし

右

ふまやる神の子室の便を境
うけていくせ乃彩とみまらん
神の法室ハ神のまて和也
まて鏡とい梯お鏡とくけ
とく也久き事といふんまめこ
は鏡のといく世彩とみまらし

右

心とけしきとのとく別
せしの付がけしとて別てその
人の心とけしとて別てその
おもけしとがしとて別てその

右

筑波の海とけしと吹凡お
人の心れを神をばれがれ
けしとて筑波の茂るれと
入おしとけしとけしとけし
筑波の心とけしと吹凡お人
乃心ひまもるまきとし

右

和とすし月と慈とあそそ
命ありむらふとの思ふと
月とむらふらるる命の相と
なわ月ふらうとてと月と恨
そとけしと一候お月命と
めせとむらひととてとてり

右

がふと我とわれ神乃上と
後とけしとけしとけしと
月とけしとけしとけしと
んがけしとけしとけしと

わさしと見しうんこなり

左

かく渡やうかの夜をれがうし
別すうの何乃りあう志のまん
志のふい志さふ也八入の夜は
くくそめやもせくくのこく乃
紅渡お夜と隣らも別をさう
ゆかやわぬ水渡いおあくと
なれすい也ふうひもけりすと
かかさめたるやわ

大

人ん何お夜がむいあうし
枉本乃隈のよちもそまうす
照月と枉本の隈おしりそ
けりすあふと人とほかろそ
や哥お同着きろこのやわ
よさき乃隈といふ人の松本
川とて心本のうけろとこち合

て鑑ふすうこむるいよそく
人にとおいうらとらるおけりわ
あはれお夜もよおもそすうぬ
がら

大

せめく思ふ今一きひ乃道事い
けろくむ何や知大なるん記
せめくといきひ思ひせめておす
乃事ふかかわりけろくむ川とい
三途河や及河とい女をうめ
て逢をらる思ふよとむくもそさ

大

床いわおぬさくがふさえ杖凡の
めお見ぬ人とそあふおかんむ
世中らくも有るおあふん全ぬ
人もあふいわらりそあふん
とありしそあふにんこぬけり
床いあぬとあふり杖凡そり

とけか新きまらり

た

命きおろし遊離と松浦川
うらぬかきもよとめとそ
雲浦川の隈乃ちりに光陰り
ほり行や命あらし遊離も
うらぬかきつらぬ光陰か
おぼしめよしとけり

た

萩乃えのす清吹がひく杖氏お
そほしめぬあのをさけてそ思ふ
こ乃ちまらり

た

やすむおおきん方もあらし乃
とそふまの袖ふのこらなく
おの女房のいふりりて見
ふし官やすむおおつらぬ
いなる女房のこふ侍侍て

祢とがうすそとがらきと
松浦がら松の樹おけり

た

ほりがしやみはのそ海雲と乃つら
みよし一夏乃がらみのかい
いさやうとや目の本(おん)もの
みはの隈松すらしいぬん
そ、夏乃跡がらみきり

た

わをれ貝それと鳥の枝をて
人張ぬぬのうらみてうら
わをれむとそれともうら
人い一めみしまたに又も
た

尾刈れがら中おがらり
まはかきわをせかほき
かさき乃し一星の遊離
しすらり柳らり

り馬の川あふさせとけり
た

世中を馬の駒との志のふんさ
いく世の客と慕いてさむじ
住らして我々のき乃きふ系
あふさくしけき客れ
同宿内侍家とけりし時のあ
やち世と捨くさる里を思ひて
乃んがわ

右

谷川た橋本の橋と埋木も
人あましくきぬみらやそなむ
山居のそしに橋もあけぬし
そのとく我哥道も人あましく
せしして橋とけりしり歌さ
あつあがわ
ゆよのゆふはきふふらあも
うらりりふとさといはらあ人

里こといてしとさうらり
所りあゆふ名乃こ名お浦そく
さうとらわゆるとといぬとぬ
比乃んがわ

右

おきつがみすま破へのうきまら
をささうらりわ橋やみはらむじ
けの毎ふ袖て彼張皮ふを
けらるい橋やみはらむじ

右

和哥乃浦やが記をる朝のみとつ
朽祿わのあき名をふのうらて
が記をる物いけ代のせいおは
の系しある哥い前乃無島
れ代ふれともわあともえぬと
い早下りわらふとはうらも
哥道ふ身とくうしむらん
がわ

た

春日とてそののたも申結ぬ
身とてうらとて一の木の夕夕言
春日山とて板長ふれいせとて
のたとて藤弘の事や藤弘と
いふ所の事し申結ぬとて大
細とてとててかろぬと申結て
といひちかぬとてうらとてい
こりちかぬの夕夕言といふら
一たかあ物やなふとて身ハ
今とてあしとて一後成所
とてふりしとてとて

た

春日とてそののたも申結ぬ
身とてうらとて一の木の夕夕言
春日山とて板長ふれいせとて
のたとて藤弘の事や藤弘と
いふ所の事し申結ぬとて大
細とてとててかろぬと申結て
といひちかぬとてうらとてい
こりちかぬの夕夕言といふら
一たかあ物やなふとて身ハ
今とてあしとて一後成所
とてふりしとてとて

但命をふあつハ又ハ此事
やうとていかり

た

春日とてそののたも申結ぬ
身とてうらとて一の木の夕夕言
春日山とて板長ふれいせとて
のたとて藤弘の事や藤弘と
いふ所の事し申結ぬとて大
細とてとててかろぬと申結て
といひちかぬとてうらとてい
こりちかぬの夕夕言といふら
一たかあ物やなふとて身ハ
今とてあしとて一後成所
とてふりしとてとて

右一冊古本ありて為家卿
注也未代し字宝石二邊
之勢之不足外見也

右之古本は法貴寺寶相院
庫藏之秘本也從大僧正
恩借而之各院并書寫之
示書寫之再校合之
外類不之考し之也

享保己亥

子酉十一月十一日

和陽田原書述下

家承氏意也



五

五

五

五

